

# 山梨での30年間を振り返って

国立大学法人 山梨大学学長  
公益社団法人 日本皮膚科学会理事長  
島田眞路 (昭52卒)

学生時代は、五年間鉄門野球部に所属、M3時にはキャプテンも務めました。京都市中学生野球大会では準優勝しましたが、東医体での成績面についてはよい思い出はありません。ただ、多士済々の先輩がた、尾形悦郎先生(昭31卒)、森岡恭彦先生(昭30卒)、黒川清先生(昭37卒)、落合慈之先生(昭46卒)、中村耕三先生(昭48卒)、落合直之先生(昭48卒)、上西紀夫先生(昭49卒)、岩本愛吉先生(昭49卒)、有賀徹先生(昭51卒)など、の知己を得たのはよい思い出です。昭和52年、1977年卒業で、野球部出身の先輩がた(原田昭太郎病棟医長(昭37卒)、滝沢清宏外来医長(昭41卒)、佐久間将夫医局長(昭41卒))に勧誘されたのと、すぐに助手になれるというので同期生(中川秀己先生、関利仁先生)を誘って皮膚科に入局しました。従って研修医の経験

奥村康先生(順天堂大学特任教授)と出会いました。1983年から米国国立衛生研究所NIH皮膚科部門(Stephen I. Bernstein, NIAMS所長)に四年間留学、恥ずかしながらNathan Scalesを目指して研究に没頭しました。その間、NIHでは色々な出会いがありました。鉄門からも続々と10数名(門脇孝先生(昭53卒)や河野憲二先生(昭49卒)、辻省次先生(昭51卒)、堤治先生(昭51卒)、同期の小澤敬也先生、中村博彦先生、小池和彦先生(昭55卒)など)留学してました。AIDS薬開

発で著名な満屋裕明先生(国立国際医療研究センター研究所長)と出会ったのもNIHです。今に至るまで家族ぐるみで親しくしています。1987年(34歳)には山梨医科大学助教授として帰国しました。あまりの環境の違いに京都大学IPS細胞研究所の山中伸弥教授がよく言われるPAD Down(America Depression)に

院皮膚科長・助教授となり、1995年山梨医科大学教授となりました。JSIDでは2002年事務総長、2005年理事長となり、2008年には第5国際研究皮膚科学会IIDD(日米欧の合同研究皮膚科学会)会長となりました。

IIDDは私の故郷、京都で開催しました。私の留学時には研究レベルの格差から全く相手にされなかったJSIDでしたが、アメリカ(SID)、ヨーロッパ(ESDR)の研究学会と全く対等な立場で運営しました。(その後SID、ESDRからは名誉会員の称号をいただいています。演題数1350(アメリカ450、ヨーロッパ450、アジア450)、参加人数2000名(各地域から650名ずつ)でした。山梨大学からの演題は、Plenary session, oral session、共に日本の大学のなかでも最多

となり感慨ひとしお、深い喜びを覚えました。(その後、論文はBlood, JCI, Cell Host Microbe, JID等に掲載) JSIDでは20年間理事として、その発展、国際化に貢献したものと自負しています。IIDDは、五年に一回ですのアジアに繰るのは15年に一回となります。2023年のIIDDは韓国との勝負になりましたが、昨年12月無事、東京での開催(会長 梶島健治京大教授、事務局長 藤本学筑波大教授(平4卒)を勝ち取りました。現在、日本の科学技術研究力の低下が叫ばれている中、皮膚科学分野は

JSIDという研究中心の奇跡的な学会のおかげで比較的健闘しているものと思います。2012年日本皮膚科学会(会員数12000人)理事長となり、数々の改革を成し遂げ、三期六年無投票再選で務め上げ、この六月退任予定です。理事長任期中、公益社団法人化、事務局長解任(セクハラ、パワハラ)、理事・理事任期制導入、女性理事導入また総会、支部総会など学会を運営会社に頼らず自己運営できるようにしたことなど色々改革しましたが、最も印象的なのは日本専門医機構の改革に成功したこと。役員選考委員として学会否定路線の前機構の理事長をはじめ、理事をほとんど入れ替え、吉村博邦(昭41卒)新理事長誕生の素地をつくりました。

一方、山梨大学では病院長を2009年から2015年まで、やはり無投票再選で三期務めました。最も印象的なのは東日本大震災(2011年3月11日)で、南三陸町へ3月18日、5月13日まで計22班、124名を送り続け、私自身も二回参加したことです。さらに、誰も経験したことがないと思うのは、看護部長が突然辞任(ハラスメントで事実上解任)した後、私自ら看護

はありません。1981年には医局長となり久木田淳教授(昭23卒)が会長であった国際皮膚科学会を経験、日本皮膚科学会最高賞である皆見賞(The best paper of the year)受賞、1982年には医学博士となりましたが、これでいいのか?と自問自答、反省し1982年多田富雄教授の主宰する免疫学教室に国内留学、大学院生の下で研究の厳しさを学び、同時に生涯の師である

く相手にされなかったJSIDでしたが、アメリカ(SID)、ヨーロッパ(ESDR)の研究学会と全く対等な立場で運営しました。(その後SID、ESDRからは名誉会員の称号をいただいています。演題数1350(アメリカ450、ヨーロッパ450、アジア450)、参加人数2000名(各地域から650名ずつ)でした。山梨大学からの演題は、Plenary session, oral session、共に日本の大学のなかでも最多

となり感慨ひとしお、深い喜びを覚えました。(その後、論文はBlood, JCI, Cell Host Microbe, JID等に掲載) JSIDでは20年間理事として、その発展、国際化に貢献したものと自負しています。IIDDは、五年に一回ですのアジアに繰るのは15年に一回となります。2023年のIIDDは韓国との勝負になりましたが、昨年12月無事、東京での開催(会長 梶島健治京大教授、事務局長 藤本学筑波大教授(平4卒)を勝ち取りました。現在、日本の科学技術研究力の低下が叫ばれている中、皮膚科学分野は

JSIDという研究中心の奇跡的な学会のおかげで比較的健闘しているものと思います。2012年日本皮膚科学会(会員数12000人)理事長となり、数々の改革を成し遂げ、三期六年無投票再選で務め上げ、この六月退任予定です。理事長任期中、公益社団法人化、事務局長解任(セクハラ、パワハラ)、理事・理事任期制導入、女性理事導入また総会、支部総会など学会を運営会社に頼らず自己運営できるようにしたことなど色々改革しましたが、最も印象的なのは日本専門医機構の改革に成功したこと。役員選考委員として学会否定路線の前機構の理事長をはじめ、理事をほとんど入れ替え、吉村博邦(昭41卒)新理事長誕生の素地をつくりました。

一方、山梨大学では病院長を2009年から2015年まで、やはり無投票再選で三期務めました。最も印象的なのは東日本大震災(2011年3月11日)で、南三陸町へ3月18日、5月13日まで計22班、124名を送り続け、私自身も二回参加したことです。さらに、誰も経験したことがないと思うのは、看護部長が突然辞任(ハラスメントで事実上解任)した後、私自ら看護



2018年  
(平成30年)  
3月号  
(第751号)

## 鉄門 いまどき

2015年には、学長に選任され現在三年目の終わりにさしかかっています。副学長には先輩である岩崎甫先生(昭48卒)に就任していただいています。運が良かったのは本学卒業生の大村智先生(ノーベル医学生理学賞受賞)です。これを契機に厳しい逆風の中、地方大学である山梨大学を何とか発展させたいと願っています。10年間の国立大学運営費交付金1%削減は国立大学の研究・教育力を奪う財務省主導の誤った政策ですが、日本経済新聞(2017年4月3日)やIIDE現代の高等教育(2018年1月号)や、週刊東洋経済(2018年2月10日号)に政策批判の記事を掲載していますので、一読いただければ幸いです。

